

大津

1999  
No.39

歴博だより



## 動物彫刻の世界

— 宗教美術の脇役たち —

平成11年10月23日(土)～11月28日(日)



木造獅子 個人蔵

「動物彫刻」と聞いて、みなさんはどのようなものを最初に想像されるでしょうか。「狛犬」ですか。「眠り猫」ですか。一体日本人はいつごろから、そして、どのような動物彫刻を造ってきたのでしょうか。

我が国で動物が造形化され始めたのは、縄文時代と言われています。古墳時代になると、鶏や水鳥・犬・馬など、動物をかたどった埴輪が数多く造られました。それらは単にその姿を愛でるといっても、さまざまな祈りのためのものであり、宗教的な意義をもつものであったと思われまます。

やがて仏教の伝来とともに、動物たちはホトケを守護する獅子などの霊獣として表現されるようになってゆきます。その後、平安時代の本格的な密教の導入によって日本の仏教が新たな段階を迎えると、象や牛などが仏像の台座になり、孔雀が頭のてっぺんに顔を覗かせるなど、動物彫刻の世界も多彩になってゆきます。これは、ホトケの聖なる力の象徴が、彼らの姿を借りて説明されたためです。その中には、架空の動物や当時の日本人が実際に目にしたことのない動物も数多く造られました。

一方、神道の世界でも動物との関係は深く、神社の狛犬などがすぐに思いおこされるでしょう。また、日吉社の猿、春日社の鹿、天神さんの牛などが、特定の神と結びついた聖獣としてよく知られています。

本展では、日本の動物の白眉である京都・高山寺の作品群や、県内で見出された未紹介の作品を含め、我が国の宗教彫刻を飾る優れた脇役として誕生したこれら動物彫刻の数々を集め、その歴史的展開を探ります。あわせて、日本人がいかに動物を愛し、親しみを持ってきたかを感じていただければと思います。

## 企画展の内容

本展では、最初に動物彫刻の前史として、古墳時代の「動物埴輪」を、次に動物彫刻史上、独特な世界を持ち、さらに揃って展示されることの少ない「高山寺動物彫刻群」を、そして、様々な種類の素材（木材・金属・陶器など）で造られた各種動物彫刻（獅子・狛犬・象・馬・竜・鶴・猿・牛・鳳凰）を展示します。

## 主な展示品

### ◆木造獅子

寄木造 一軀

個人蔵

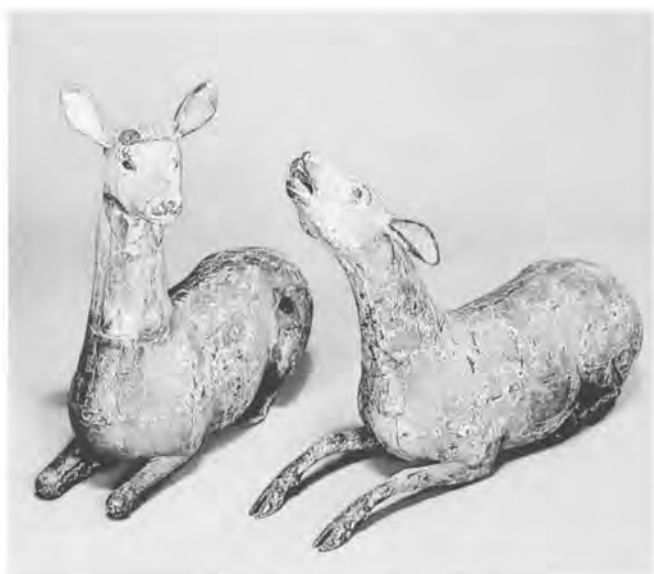
もともと背中の上に蓮華座があり、文殊菩薩が座っていた獅子です。眉間を寄せて口をかつと開く顔や、足を力強く踏ん張る姿は、仏敵を威嚇しているようです。全体によく残る彩色、切金（金箔の細工模様）は当初のものと思われ、その筋肉表現や動きのあるたてがみ等に見事な彫刻表現は、鎌倉時代を代表する獅子彫刻といっても過言ではありません。（表紙写真）

### ◆重要文化財 木造神鹿

寄木造 一对

京都市・高山寺蔵

牡は耳をピンと伸ばし、静かな様子であるのに対し、牝の方は、首を伸ばして鳴いているようで、豊かな動きを表し、阿吽一對のつがいを表しています。その実際の鹿を見て造ったような表現は、鎌倉前期の代表的な彫刻といえ、さらにその自由な構成は、この像を日本動物彫刻史上における白眉と呼ぶのふさわしいものになっています。



### ◆木造仔犬

寄木造 一軀

京都市・高山寺蔵

まるまるとした全身の肉付け、短くも柔らかな前足など、子犬の形態を正確に写し取ったものといえます。やや首をかしげ、きょとんとした表情からは、子犬らしい雰囲気伝わってきます。このような優れた作風から、ひよっとしたら運慶の長男の湛慶（たんけい）の作かもしれません。高山寺を復興した明恵上人が愛玩していた様子も目に浮かぶようです。鎌倉前期の作と考えられます。



## ◆木造象 寄木造 一軀

高月町・向源寺蔵

全体に量感に満ちた迫力のある象です。口の中に歯や舌をきちんと彫っているところや身体を締めるバンドが肉にくい込む様など、写実的表現が随所に見られます。もともと背中に蓮華座があつて普賢菩薩が乗っていたと思われます。全国的に見てもかなりの古い象といえ、おそらくは平安時代まで遡ると考えられます。彩色は全て剥落し、木地が露出してはいますが、それがかえって彫刻としての魅力を引き出しているといえます。



## ◆木造俱利迦羅不動明王立像 一軀

大分県・小武寺蔵

## ◆重要文化財 木造舞楽面陵王 一面

大阪市・四天王寺蔵

この二つの彫刻はいずれも竜の彫刻です。前者は、不動明王の化身ともいわれる俱利迦羅竜王が、不動明王の持物の私利を飲み込もうという形を表しています。後者は舞楽に使われた面で、頭の上に竜が力強く乗りかかります。



# ミニ企画展

Exhibition on a small scale.

11月～1月

## 瓦の美・大津の古瓦

11月2日(火)～12月26日(日)

六世紀も終わろうとする頃、飛鳥の地に、我が国で初めての寺院（飛鳥寺）が建立されたが、その屋根には今まで目になかった新しい素焼きの焼き物Ⅱ瓦が葺かれていた。以来、白鳳時代から奈良時代にかけて、各地に多くの寺院が造られ、加えて、藤原京以後の都城や地方官衙（役所）の中心建物にも瓦が使われるようになり、多量の瓦が各地で生産されるようになっていった。

瓦は、大半が平瓦と丸瓦と呼ぶ瓦で占められるが、そのなかに、表面に文様を表現した、軒先を飾る瓦が含まれている。これには軒丸瓦、軒平瓦の二種類があり、前者は蓮華、後者は唐草を圖案化した文様が主流となっているが、地域や時代により、種々の文様が表現されていることから、寺院の時代や性格を考えていく上で重要な資料となっている。

大津市においても、七世紀中頃から寺院の建立が始まり、七世紀後半から八世紀にかけて多くの寺院が建ち、当地にしか見られない軒先瓦

も葺かれていた。今回は、そのなかから、大津宮と近江国府に焦点をあて、大津宮に関わりの深い寺院に葺かれていた「サソリ文瓦」と呼ばれる蓮華文方形軒先瓦（南滋賀廢寺）や花卉文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦（園城寺）、近江国府とその関連施設群に葺かれた、流れる雲を表現したように見える「流雲文（飛雲文ともいう）軒丸瓦・軒平瓦」など、当地の白鳳・奈良期を特徴づける瓦類を中心に紹介する。

さらに、時代は下がるが、一六世紀後半の時期、坂本城に続いて、大津の地（現在の浜大津一帯）に築かれた大津城跡の発掘調査が本市教育委員会の手で断続的に行われているが、近年の調査（平成七年度）で、瓦の文様（桐文など）の表面に金箔を施した瓦（金箔瓦）がはじめて出土し、注目を集めているので、今回の展示に合わせて特別に出品する。また、参考資料として、金箔瓦の資料ではもつとも著名な安土城跡出土の金箔瓦もいっしょに展示する予定にしている。



南滋賀廢寺出土瓦類（近江神宮蔵）

# 仏教美術の名品

平成12年1月6日(木)～30日(日)

これまでのミニ企画展は、ある特定のテーマにもとづいた作品を展示してきましたが、今回は趣向を変えて、指定文化財をはじめとする当館収蔵の名品セレクションにしてみました。

とりあげる作品のジャンルとしては、仏像・仏画・動物彫刻となります。いずれも見ごたえのある名品揃いで、これまでの展覧会で好評を博した作品ばかりです。ここでは、主な展示作品を二・三紹介いたします。

## ◆県指定文化財 聖観音立像 九品寺蔵

木造 像高一七四・二

旧大津町に所在する九品寺の脇壇に伝来した像です。一〇世紀末頃の制作と推定され、正面は細見で腰高の美しい姿をみせる一方、側面から見ると一木彫像らしい重みのある像容をしています。洗練されたお顔、体軀や衣文のラインが印象的な像といえます。平安時代。



聖観音立像

## ◆両界曼荼羅図

絹本着色 本館蔵

各一三三・〇×一三三・五

密教における宇宙観をあらわしたものが曼荼羅です。胎藏界と金剛界の二幅からなります。真言宗で用いられるものと、天台宗系統のものとは図様が異なる場合がありますが、本作は、とくに金剛界を八一体の尊像のみであらわした類例の少ない貴重な天台系の曼荼羅(八一尊曼荼羅)です。南北朝～室町初期の制作と考えられます。



天台大師像

## ◆重要文化財 天台大師像

絹本着色 西教寺蔵

一一六・七×五八・二

実質的に天台教義を樹立した中国天台宗の第三世、天台大師智顛の肖像画です。本作には、中国で描かれた作品ならではの、非常に精度の高い筆技が発揮されています。

とくに、端正な大師の顔立ちが貴品を感じさせつつもその線描は精巧を極めており、法衣の文様も細部にわたって緻密に描写されています。本作は中国南宋時代に寧波(現浙江省)で活躍していたとされる張思訓による仕事です。

12月		11月				10月																	
土	11	土	4	土	27	土	20	土	13	土	6	土	30	土	9	日	3	土	2	金	1		
	第68回親子歴史講座		三三三企画展関連講座		企画展関連講座		企画展関連講座		第67回親子歴史講座		企画展関連講座		企画展関連講座		第68回親子歴史講座		「図説 大津の歴史」 発刊記念講演会③		「湖の道・陸の道」 講師 木村 至宏(本館館長)		「図説 大津の歴史」 発刊記念講演会①		
	○手作りのしめなわをつくってみませんか 10時～11時30分 講師 木津 勝(本館学芸員)		○白鳳時代の瓦を中心に、近江における特色を紹介します 13時30分～15時 講師 松浦 俊和(本館学芸員)		○日本各地に伝わるさまざまな動物彫刻について紹介します 13時30分～15時 講師 岩田 茂樹(奈良国立博物館主任研究官)		○展覧会に出展された動物たちの魅力を語ります 13時30分～15時 講師 寺島 典人(本館学芸員)		○動物彫刻の世界展にあわせて、ちょっと難しい動物おりがみに挑戦します 10時～11時30分 講師 横合賢一郎(本館学芸員)		○動物彫刻の世界展にあわせて、中世の獅子頭を語ります 13時30分～15時 講師 根立 研介(京都大学大学院文学研究科助教授)		○動物道輪の魅力を語ります 13時30分～15時 講師 高橋美久二(滋賀県立大学教授)		○動物道輪の魅力を見学します 10時～11時30分 講師 和田 光生(本館学芸員)		○大津祭の青山の準備風景を見学します 14時～16時 会場 蒲田支所		「大津―その歴史と文化」 講師 木村 至宏(本館館長) 「大津京と近江国府」 講師 井上 満郎(京都産業大学教授)		「湖の道・陸の道」 講師 木村 至宏(本館館長)		「大津 其の歴史と文化」 講師 木村 至宏(本館館長) 「戦国武将と大津の城」 講師 森谷 勉久(武庫川女子大学教授)
	しめなわ作り挑戦!		古代近江のやきもの		動物彫刻の魅力		大津に集う動物たち		おりがみに挑戦! ②		獅子頭の世界		埴輪の動物たち		宵山の準備を探検しよう								

れきはくインフォメーション

※諸般の事情により、内容が変更される場合があります。

※いずれの講座もはがきで、お申し込みください。

- 発行 平成11年10月1日
- 価格 上下二巻セット 5,000円
- 体裁 A4判 カラー貼箱入り 各巻平均250頁  
写真・図・表を約1,000点収録
- お問合せ 大津市歴史博物館 市史編さん室 TEL(077)521-6173



## 「図説大津の歴史」いよいよ刊行

平成一〇年、大津市制一〇〇周年を迎えました。その記念事業の締めくくりとして企画された「図説 大津の歴史」が、一〇月一日に、いよいよ発刊されることになりました。

『図説 大津の歴史』は、原始・古代から、市制一〇〇周年の平成一〇年まで、大津の歴史の特色を、上巻(江戸時代以前)・下巻(明治時代以後)の二巻、計五〇〇ページに簡潔にまとめました。構成は、図版や写真をふんだんに使用し、「目で見る歴史」として楽しめるように編集しています。